



Title	積雪寒冷地域と温暖地域の小学生における冬の捉え方
Author(s)	蓑川, 恭子; 絵内, 正道; 羽山, 広文
Citation	大会学術講演梗概集. D-1, 環境工学I, 室内音響・音環境, 騒音・固体音, 環境振動, 光・色, 給排水・水環境, 都市設備・環境管理, 環境心理生理, 環境設計, 電磁環境, 2004, 857-858
Issue Date	2004-07-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/50567
Rights	日本建築学会. 本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである.
Type	journal article
File Information	GKKD-1_857-858.pdf



積雪寒冷地域と温暖地域の小学生における冬の捉え方

正会員 ○ 蓑川恭子*1

" 絵内正道*2

" 羽山広文*3

積雪寒冷地域、温暖地域、冬への適応、小学生、アンケート調査

1. はじめに

冬は北海道を考える上で非常に重要な要素であるが、現代社会において否定的に考えられているように感じられる。一方、子供達が外で楽しそうに活動し、遊ぶ姿は、冬でもごく日常的な光景となっている。特に小学生低学年の様子からは、冬を否定的に捉えていないようにも感じられる。では、実際のところ子供達は冬をどのように捉えているのだろうか。

2. 研究目的

積雪寒冷地域の屋外公開空地は、冬、本来の使用目的に使用されずに、堆雪場になっているという現状がある。このような現状が果たして良いのだろうか。屋外公開空地、特に街区公園や近隣公園の通年の使用を考えるための基礎資料づくりのために、まず積雪寒冷地域の小学生が冬をどのように捉えているのかを知る必要がある。

本研究では、主に小学生を対象とし、冬をどのように捉えているのかを探っていく。子供達は冬を肯定的に受け止めているのか、否定的に受け止めているのか。成長過程にある子供達の冬への感じ方の変化、子供達から見た冬の捉え方を調査した。

3. 調査方法

本研究では冬への感じ方の調査方法としてアンケートを用いた。アンケート項目はカナダの都市計画者N. Pressman教授の提案する以下に記す「冬への適応に関する6水準」を用いた。

Six levels of adaptation to winter

- | | |
|------------------------|---------|
| 1. Enduring Winter | 冬を忍耐する |
| 2. Tolerating Winter | 冬を大目に見る |
| 3. Accepting Winter | 冬を受け入れる |
| 4. Respecting Winter | 冬に期待する |
| 5. Appreciating Winter | 冬に感謝する |
| 6. Celebrating Winter | 冬を祝賀する |

水準1から水準6へと冬への捉え方はネガティブからポジティブな心情へ変化する。回答者には単独あるいは複数回答を可能とする。ただし回答者には6水準の合計が100%となるように回答をお願いした。評価軸を6水準とし合計を100%として回答して貰う理由は、冬に対する感じ方は「好き」や「嫌い」という単純な一要素だけではなくさまざまな感情が入り混じっているものだと捉えたためだ。

小学生にもこれと同じ調査を実施することとした。ただし、小学生用のアンケートは言葉を大人用から子供にもわ

かりやすい平易なものに直すと共に回答方法も百分率の代わりに全部で「ボール10こ」の投票を用いて回答して貰うこととした。小学生用の質問項目は次の通りである。

1. 冬はいやだなあ (じっとしていよう)
2. 冬がくるのはしかたない (あきらめた)
3. 冬はくるものだ (なんとかなるだろう)
4. 冬はないより、あったほうがいい
5. 冬があると、たのしい
6. 冬はほんとうにうれしい

上述の冬に対する心理的な感情を探る質問項目以外に、小学生用のアンケートには小学生の遊びを調査するための6項目をアンケートに加えることにした。

調査は北海道以外に温暖地域である静岡県においても実施し比較検討した。アンケート調査は、積雪寒冷地域においては札幌市にある北海道教育大学教育学部附属札幌小学校(484名)、温暖地域においては静岡県中部にある金谷小学校(381名)、静岡サレジオ小学校(356名)で実施した。

4. 調査結果

教育大学附属小学校(図1～図6)と金谷小学校(図7～図12)の結果を見ると、どちらの地域でも、低学年ほど水準5や水準6といった冬に対して肯定的な項目への回答が多く、高学年になると次第に水準1や水準3への回答が増えている。地域に関係なく高学年よりも低学年の方がより肯定的に冬を受け止めている傾向が見られた。

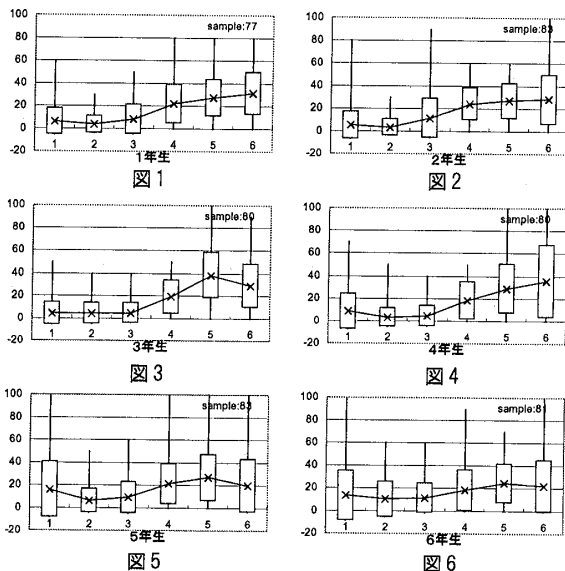
次に、附属小学校で児童に回答して貰った一週間に遊ぶ日数(A. 1～2日、B. 3～4日、C. 5～6日、D. 毎日)によって全学年を分類した結果を見ると、外へ出る場合ほど水準4・水準5・水準6への回答割合が高かった。この結果から外へ出る児童ほど冬を肯定的に捉えていると言えそうだ。

外に出ない理由として附属小学校でのアンケート結果(図13)で多かったのが「遊ぶ時間がないから」、「寒いから」という回答であった。その他に多かった理由としては「遊ぶ場所がないから」という回答であった。約1割がこのように答えておりこの点については考慮が必要であろう。

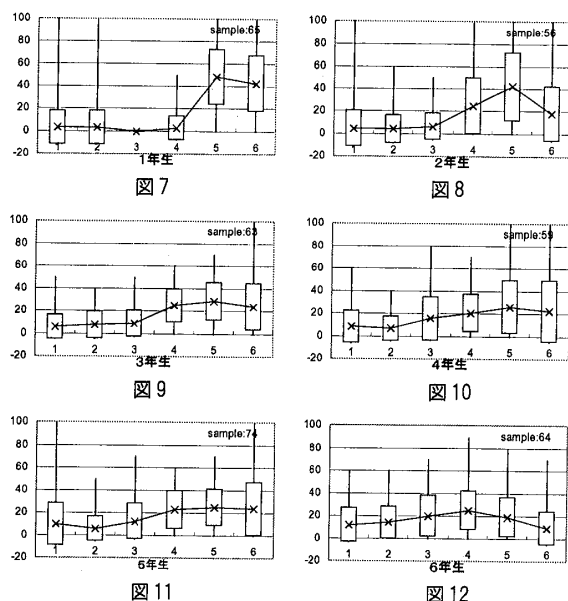
それでは冬を好きな理由はなんなのか。自由解答欄より得られた感想を可能な範囲内で分類すると附属小学校(図14)では「冬にしか出来ない遊びが出来るから」好きという理由がもっとも多かった。一方、静岡県のサレジオ小学校では「雪が降って楽しいから好き」という答えが目立ったが実際には雪は年数回しか降らない。またお正月やクリスマスといった「イベントがあるから好き」といった答え

から、冬をイベント的な側面から捉えている傾向が強いと言えそうだ。ここから地域によって冬に対する肯定的度合いはさほど変わらないが、冬への捉え方に関しては地域差があると言えそうである。

北海道教育大学教育学部付属札幌小学校



金谷小学校（静岡県）



凡例

最高 平均 最低
+σ × -σ

凡例の最高は、最高値を、+σは平均値+標準偏差、平均は平均値、-σは平均値-標準偏差、最低は最低値を表している。

またグラフの横軸は1～6の水準を縦軸は割合を示す。

- *1 北海道大学大学院工学研究科 修士課程
- *2 北海道大学大学院工学研究科 教授・工博
- *3 北海道大学大学院工学研究科 助教授・工博

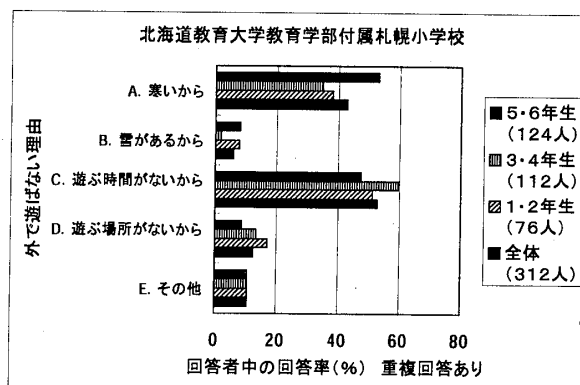


図 13

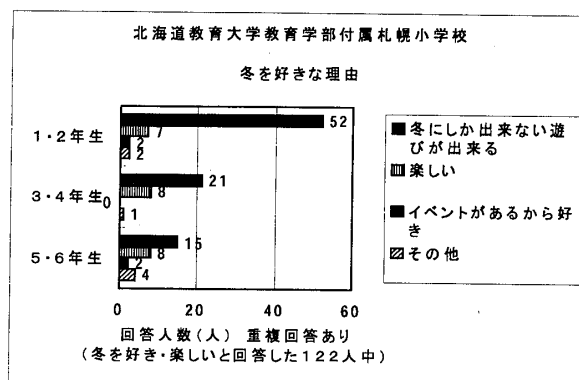


図 14

5. おわりに

調査結果を見ると、冬における雪の存在は、物理的のみならず、内面的あるいは精神的な部分へ非常に大きく影響していることがわかる。

実際には、外へあまり出なくなり、雪遊びの楽しみを忘れ、雪の不便さや大変さばかりが目につき始めると、冬を嫌いになる、と言えるのかも知れない。

積雪寒冷地域において、冬を考える場合、寒さからの防護だけでなく、屋外活動のあり方を提案することも必要になると言えそうだ。また負の側面からのみ捉えられてきた雪を邪魔もの扱いしなければ、冬でしかできないことが可能になり、冬の楽しみを増やす存在になる。

小学生低学年の冬の適応から、現在の街区公園や近隣公園のあり方をもう一度考え直し、冬を肯定的に捉えた通年の使用を検討して行かなければならない。

参考文献

- 1) 北海道雪たんけん館：http://yukipro.sap.hokkyodai.ac.jp
- 2) ノルマン・プレスマン著、繪内正道訳：北国の街づくりと景観、北海道大学図書観光会、2002. 1. 25
- 3) 2002年北方都市会議INあおり冬の都市フォーラム論文集、2002年北方年会議INあおり実行委員会、2002、2
- 4) 雪休日の楽しみー良さ発見型の成長へー、日本建築学会北海道支部北方住宅専門委員会、2002、1
- 5) 丸野俊一・針塚進・宮崎清孝・坂元章著：1. ベーシック現代心理学 心理学の世界、有斐閣、1996. 7. 30

Graduate Student, Hokkaido Univ.

Prof., Graduate School of Eng., Hokkaido Univ., Dr. Eng.

Assoc. Prof., Graduate School of Eng., Hokkaido Univ., Dr. Eng.